

フィプロニル1%粒剤（プリンス粒剤）施用苗の額縁移植によるコバネイナゴの防除

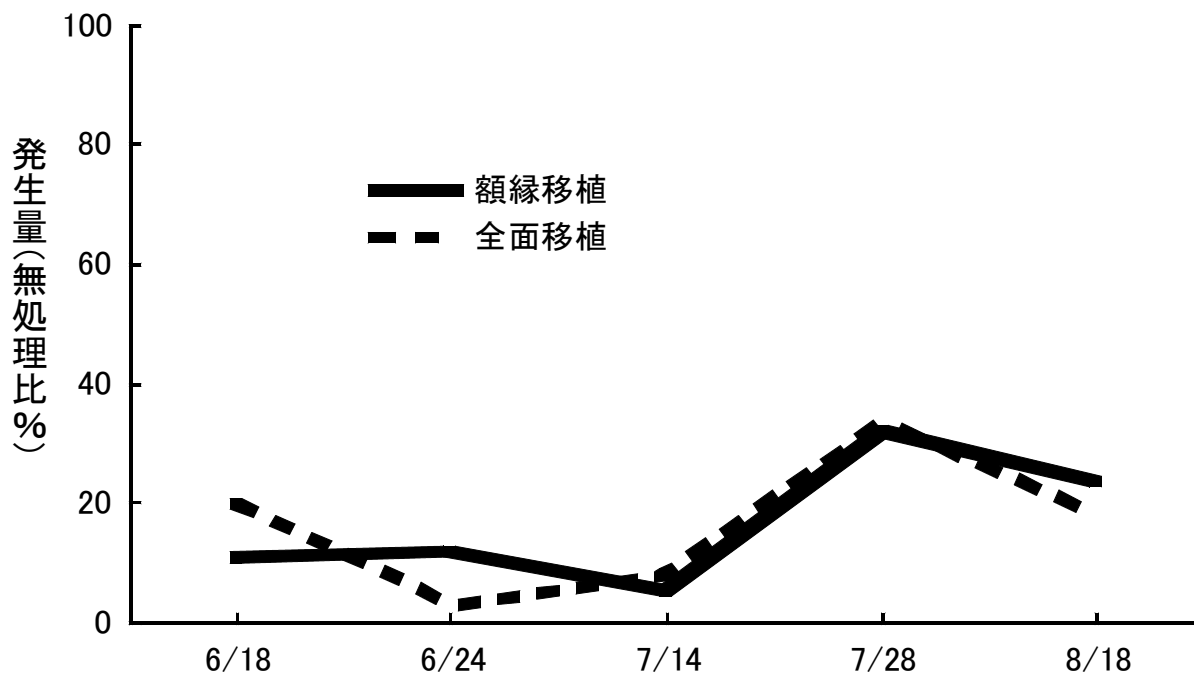
農業センター

1 取り上げた理由

畦畔から徐々に水田内部に侵入するコバネイナゴの生態的特性を利用して、本種に登録のある育苗箱施用粒剤を処理した苗を、水田周縁部だけに移植することで防除が可能か検討したところ、全面移植と同等の効果が認められたので減農薬・低コスト技術として参考資料とする。

2 参考資料

フィプロニル1%粒剤を育苗箱当たり50g施用した苗を、水田周縁部だけに移植（額縁移植）すると、処理苗を水田全面に移植した時と同様にコバネイナゴの発生密度を低く抑制できる。



第1図 フィプロニル処理苗の額縁移植区と全面移植区におけるコバネイナゴ発生量の推移

3 利活用の留意点

- 1) 今回の試験では処理苗を移植した畝数は8条であり、これより少ないときの防除効果は確認していないので、処理苗の移植畝数は8条以上とする。
- 2) 4条分だけ額縁移植した場合、10aの水田で必要な薬剤は全面移植の場合に比べて約1/5に低減できる。また、水田の区画が大きいほど、薬剤の低減割合は高まる。
- 3) イネドロオウムシは額縁移植では防除できないので、同種の発生が多い水田では全面移植とする。イネミズゾウムシは額縁移植で同時防除できる。

(問い合わせ先：宮城県農業センター作物保護部 電話022-383-8126)

4 背景となった主要な試験研究

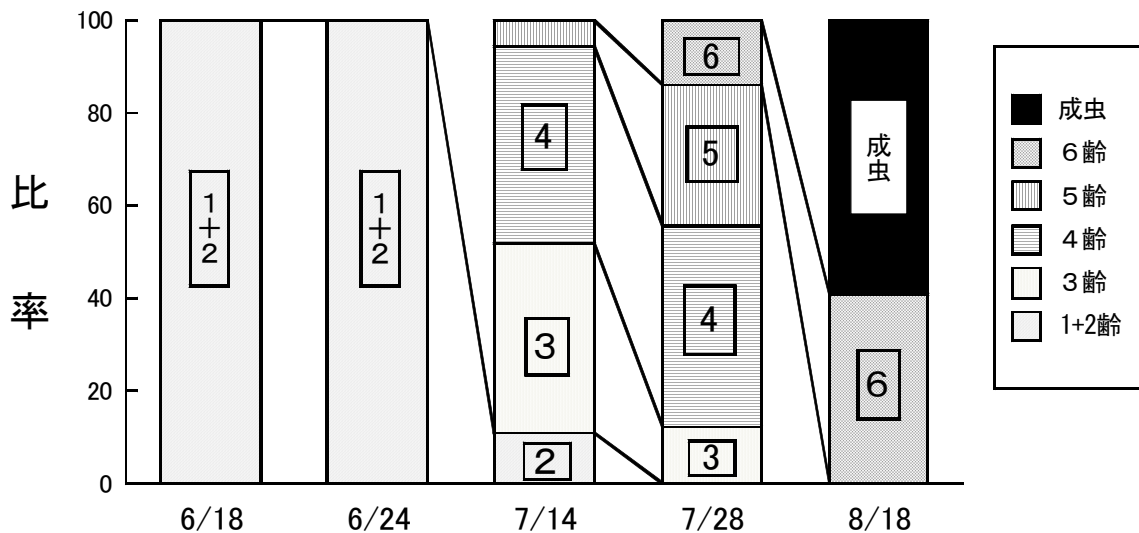
1) 研究課題名及び研究機関 水田生態系における生物機能を活用した減農薬病害虫制御技術の確立
宮城県農業センター作物保護部

2) 参考データ

第1表 各試験区におけるコバネイナゴ個体数の推移

試験区	80株当たり見取数		20回振りすくい取り数		
	6/18	6/24	7/14	7/28	8/18
額縁処理①	3	2	8	17	2
②	3	2	11	6	2
平均	3	2	9.5	11.5	2
全面処理①	7	0	14	15	0
②	4	1	17	9	3
平均	5.5	0.5	15.5	12	1.5
無処理 ①	19	18	216	55	14
②	37	16	175	17	3
平均	28	17	195.5	36	8.5

注) 品種：ひとめぼれ，移植日：5月5日，出穂日：8月3日



第2図 コバネイナゴの齢構成の推移

コバネイナゴの水田への本格的な侵入は、3齢期に達したころ起こる。この図は、7月上旬ころが侵入最盛期であったことを示すととも、少なくともこの時期までは薬剤の効果を持続する必要があることを意味している

3) 発表論文等

第53回北日本病害虫研究会 (2000)